

ウィリアム・ブレイクの女たち ——「エマネーション」と「女の意志」

今 泉 容 子

男の運命は女しだい。彩色予言詩としてブレイクが最後に着手した『ジェルサレム』から、このメッセージが発せられる。

『ジェルサレム』のなかで、ロスという登場人物がこう述べている。男たちが孤立することなくたがいに交流しあうためには、まず彼らの女（妻）どうしが交じりあう必要がある。もし彼女たちが「交じりあわなかったら……彼ら〔男たち〕は恐れてパッと離れてしまう」。彼はスピーチを、つぎのセンテンスでしめくくる——「なぜなら、男はエマネーションなしでは、べつの男と結合できないからだ」（『ジェルサレム』88葉6－10行）。

男にとって大切な女は、「エマネーション」とよばれている。しかし、女はエマネーションだけではない。「女の意志」とよばれる女も存在する。そして同じように男にたいして決定的な力をもつ。エマネーションについて語ったロスは、女の意志についてもスピーチを披露する。男が内部にもっている「王座を、女は自分のものとして要求」する。すると、「男はもはや男でなくなる」。彼女はファム・ファタールのように、男を支配するのである。

しかしまた、そういう女が力をもつのを許すのは男だという。だからロスは、男を責める。なぜ「女の意志を生みだそうとするのか」、と。

ここでもういちど、「エマネーション」と「女の意志」それぞれについて、ロスが語ったことのさわりを並記してみよう。

[エマネーションについて]

永遠界では男がほかの男と会話をするとき、彼らは
たがいの胸（そこは歓喜の場所）に入る、
たがいに交流しあって。最初に彼らのエマネーションたちが
子どもたちに取り囲まれて出会う。もし彼女たちが抱きあい、交じりあ
うなら、

四重のかたちをした男たちもまた、精神の雷鳴のなかで交じりあうだろう。

しかし、もしエマネイションたちが混じりあわなかったら、嵐や地震の揺れや焼きつくす火のなかで、彼らは恐れてパッと離れてしまう。

なぜなら、男はエマネイションなしではべつの男と結合できないからだ。
(『ジェルサレム』88葉3-10行)

[女の意志について]

男とは何だろうか？ だれも答えられやしない。でも女とは何だろう。

揺りかごから墓場まで男のうえに権力をふるう女とは。

どの男も内部に王座をもっている。それは神の王座だ。

この王座を女は自分のものとして要求した。そうになると男はもはや男ではなくなる。

アルビオンはヴェイラの神殿とか寺院になっていて、

最高位におられる方の神殿や寺院ではなくなっている。

ああ、アルビオンよ、きみはなぜ女の意志を生みだそうとするのか。

(『ジェルサレム』30 [34] 葉25-31行)

エマネイションと女の意志。いっぽうは男を理想の人間関係に導き、もういっぽうは男に破滅をもたらす。このふたつのタイプの女は、『ジェルサレム』で急速にクロースアップされる。「エマネイション」の代表格はジェルサレムで、「女の意志」のほうはヴェイラである。はっきりと正反対の特徴をもつふたりの女だ。

『ジェルサレム』の4葉のイラストに、ふたりが対照的に描かれている(図1)。ページの左上に浮かんでいる裸体の女は、ジェルサレムという名のエマネイション。彼女の片腕には子どもがぶら下がっていて、さらにふたりの子どもがジェルサレムにつぶこうとして空中を飛んでいる。ジェルサレムを先頭とする人間たちの一群の最後に、アルビオンが連なっている。彼は子どもたちのほうを直視し、自分が進むべき方向を意識しているようだ。ジェルサレムは指先で空間の一点を指しているが、そこには「ジーザスだけ」の文字が明るく浮かびあがっている。この「ジーザスだけ」の句は、聖書に出てくるが、姦淫の罪を犯した女のエピソードのところである。姦淫の女を非難できるほど潔癖だ

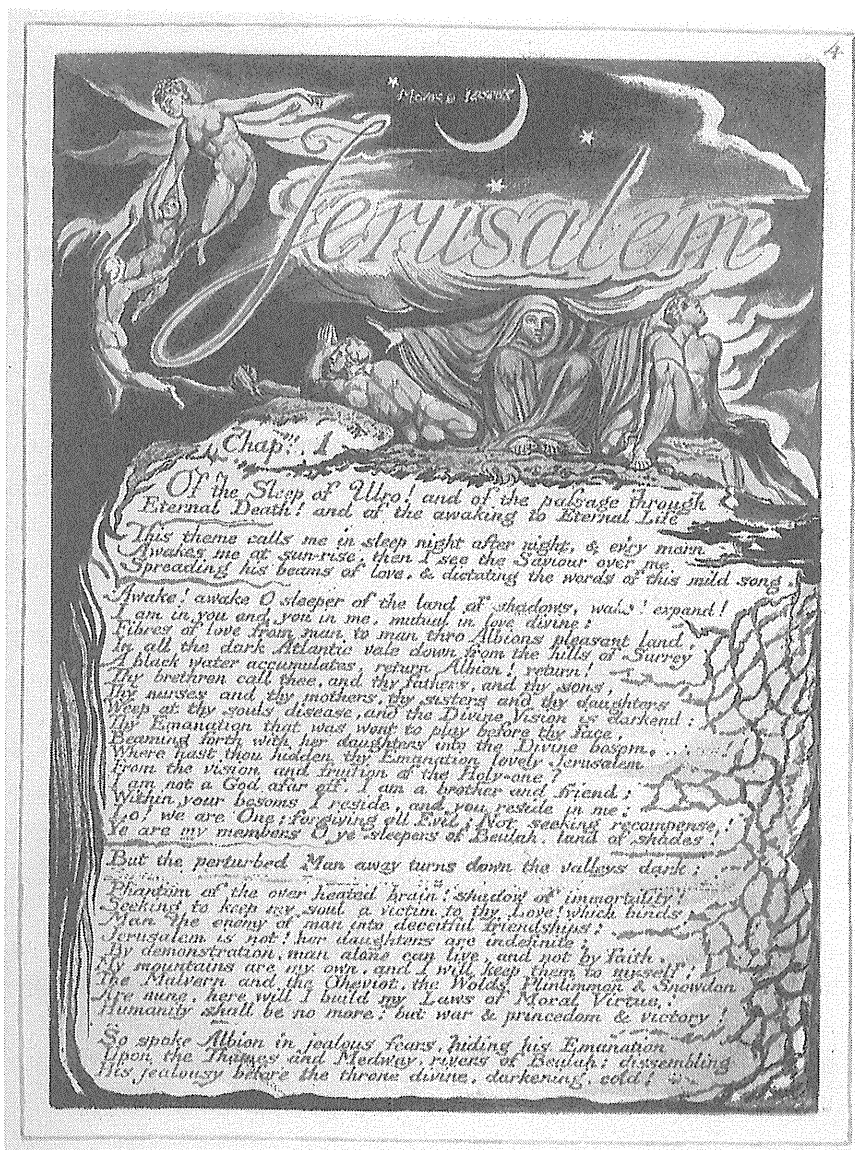


図 1

と言いう者だけ残れ、というジーザスの言葉にひとびとは去っていき、ジーザスだけが残ったというエピソード。残ったジーザスは女を非難することなく、その罪を赦した。だから、「ジーザスだけ」という句には、他人を非難するのではなく、同情してその罪を赦してやるという人間関係が暗示されている。アルビオンはいま、そうした同情と赦しの人間関係へ向かおうとしている。

おもしろいのは、彼の頭のすぐ近くまで、ヴェイラという名の女の意志がその右手を伸ばして、いまにも彼を捕えようとしていることだ。いやむしろ、アルビオンの頭は一瞬まえまでヴェイラの手には捕えられていたのが、その束縛から逃れたところなのだろう。そして、ジェルサレムのほうへ向かうところなのだろう。彼が一瞬まえまでヴェイラの支配下にあったことを暗示するのが、ヴェイラの左手（こんどは右手ではなく）にがちりと頭をつかまれたアルビオンのイラストである。頭を固定されたアルビオンは、自由に身動きがとれないようすで、視線をジェルサレムのいる場所とは反対のほうへ向けている。つまり、「ジーザスだけ」という同情と赦しの人間関係から顔をそむけているわけである。

裸で空中に浮かぶジェルサレムにたいして、ヴェイラのほうは頭からすっぽりとマントで全身を覆っている。これは、人間が裸体を露出することにポジティブな意味を付与したブレイクにとって、不吉な印である。この不吉なヴェイラこと女の意志が、ジェルサレムことエマネーションよりも大きく描かれていることは、注目に値する。これからはじまる『ジェルサレム』という詩のなかで、ヴェイラの力が圧倒的に優勢になることを暗示しているのだ。図1に見えるタイトル文字「ジェルサレム」の真下に、ジェルサレムではなくヴェイラが座を占めているのも、重要だ。ヴェイラの優位が視覚的に暗示されているわけだから。この女の意志の優位をくつがえし、エマネーションに正当な位置をあたえ努力が、これから『ジェルサレム』のなかで展開される。

このエッセイでは、エマネーションと女の意志の表象を考察していく。「エマネーション」と「女の意志」という用語は『ジェルサレム』で集中的に使われているし、そこにおける男の登場人物たちはこれらふたつのタイプの女たちに運命を握られている。だから、『ジェルサレム』をおもに取りあげていきたい。

「男」と「女」の語彙

さきに引用したロスの語りで、“man”を「男」，“woman”を「女」と訳出したが、それではまずいこともある。ブレイクの構想では，“man”は「人間」を意味し，“woman”という語は人間がもつ特定の精神作用の比喩となるはずだった。たしかに『ジェルサレム』の“woman”は、比喩として読める箇所もある。しかし一貫してそう読むことは、1970年代のフェミニスト批評が指摘したように、すこし無理がある。

“Woman”という語が使われれば、なま身の肉体的かつ社会的な「女」が想起されるのは必然。「女」という語を、「女」とは無関係だと主張するのは、やはり問題だ。ブレイク神話の基本となる考えは、どの「男」にもエマネーションという「女」が随伴するというアンドロギュノスの考えなのだが、これがなま身の男女のレベルで解釈されるとおかしいことになる。ひとりの男にひとりの女があてがわれる。いわば、夫婦が単位となっているわけだ。すると、この地球上に存在する独身のひとびとやホモ・セクシュアルのひとびとは切り捨てられることになる。アルビオンがあらゆる人間を表象するというブレイク神話は、男と女の比喩を基盤として構想されたため、いちじるしく制限されたものになってしまった。

曖昧さは、“man”をめぐっても残っている。「人間」どうしの親密な交流を語るつもりが、「男」どうしの親密さのようなゲイの匂いが濃厚に立ちこめてくる。たとえば、『ジェルサレム』のロスは、アルビオンという男を墮落の眠りから覚醒させようと骨折っている。アルビオンのために命をかけて働き、アルビオンからどんなに冷酷に扱われても「ぼくはけっして彼のそばを離れない」と宣言するロスは、ホモ・エロティシズムを喚起しないだろうか。たとえ、アルビオンが人間を、イングランドを、全人類を指すといわれても。ここでも、「女」の場合とおなじように、なま身の男が想起されることを止めることはできない。

『無垢の歌』と『経験の歌』の保母たち

「エマネーション」と「女の意志」は、『ジェルサレム』で出現しはじめたことはまちがいない。しかし、用語こそこの詩において使われはじめたが、じつは彼女たちの原型は初期の作品にすでに見られる。

『アメリカ』と『ヨーロッパ』に登場する「影の女」がそうだ。独裁的な女（エニサーモン）に抵抗して、忍耐強く新たな社会の到来を信じつづける『ヨーロッパ』の「影の女」は、男を理想の状態に導く「エマネーション」の原型。反対に、男を自分の奴隷にしようような女がいた。『アメリカ』の「影の女」がその例で、男（オーク）の心をつかみとり、彼に覆いかぶさっていた。彼女は、「女の意志」の原型。

また『無垢と経験の歌』に登場するふたりの保母も、原型といえる人物たちだ。¹「保母の歌」と題された詩は、『無垢の歌』のグループにひとつ、『経験の歌』のグループにもひとつ収められている。どちらの詩にも、保母と世話される子どもたちの関係が描かれている。

ふたつの詩のイラストを比較すれば、ふたりの保母のちがいが瞬時にしてわかる。『無垢の歌』のほうでは（図2）、保母は左端の木陰にすわって読書をしている。彼女が世話する子どもたちは、広がる緑の野原で手をつなぎ輪になって遊んでいる。アードマンが指摘するように、子どもたちの輪は保母のところで切れていて、彼女を輪のなかへ招きいれようとしているかのようだ。² 保母と子どもたちの信頼関係がうかがえる。注目したいのは、保母は左端にすわっていて、イラストの空間の大部分を子どもたちに与えていることだ。

『経験の歌』のイラストでは（図3）、保母はイラストの空間を占領して、中心に大きくそびえ立っている。彼女と子どもたちはちょうど二等辺三角形をつくるように配置されていて、保母の頭がその頂点にきているのだ。そして世話されているふたりの子どもは、三角形の右半分に押しこまれている。世話されているというよりも、保母に支配力をふるわれているようだ。髪をとかされている男の子の体は、動くまいとしてか、カチカチに硬直している。相互の交流を大切にする『無垢』の保母と独裁的な『経験』の保母は、「エマネーション」と「女の意志」の特徴をすでにあらわしていた。

ブレイクが分析したチョーサーの『カンタベリー物語』の女たち

ブレイクには、女をふたつのタイプに分けるクセがあった。チョーサーの作品における女について、ブレイクが発表した一節を見てみよう。そこには、チョーサーの女の登場人物たちがきっぱりと二タイプに分類されている。

チョーサーは女の登場人物たちをふたつのクラスに分けた。修道院尼僧

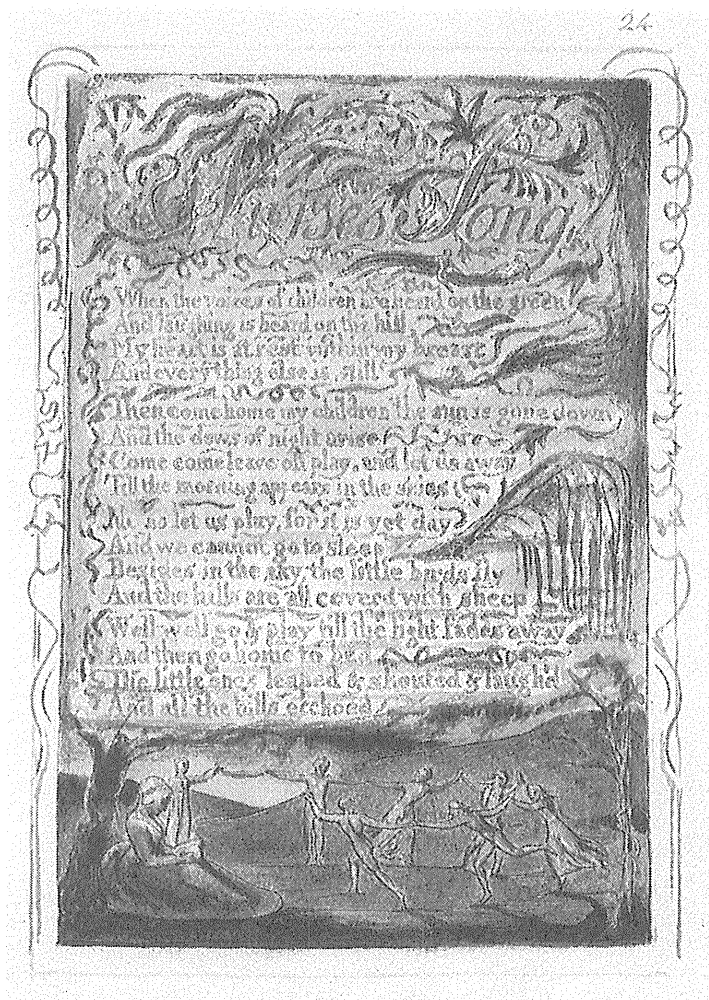


図 2

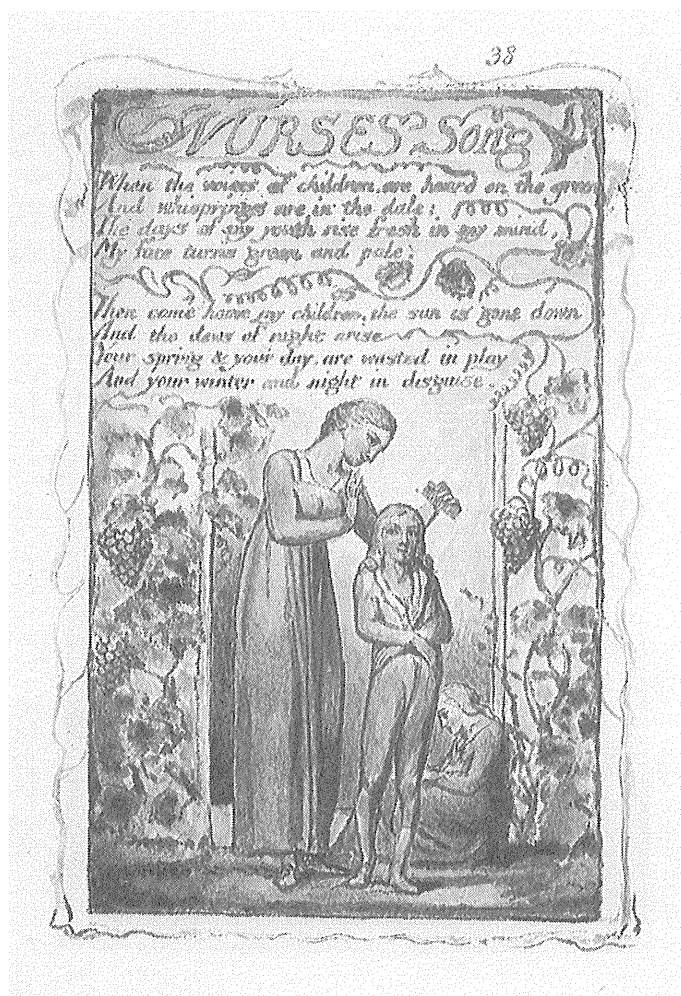


图 3

長とバースのかみさんとに。この女たちは、人間の時代を導いてきたのではないだろうか。ある時代には修道院尼僧長のほうが支配し、またべつの時代にはバースのかみさんのほうが支配する。チョーサーはバースのかみさんも、修道院尼僧長と同じくらい詳細に正確に描いた。

(『解説つきカタログ』24頁)

この一節は、そのままブレイクの女の登場人物に当てはまる。修道院尼僧長は品行方正な従順な女。バースのかみさんは男にたいして主導権をにぎる女。修道院尼僧長は「エマネーション」に、バースのかみさんは「女の意志」に相当する。そのどちらのタイプの女についても、チョーサーはえこひいきせずに、「バースのかみさんも、修道院尼僧と同じくらい詳細に正確に描いた」とブレイクは洞察する。これは、ブレイク自身の「女の意志」の描きかたにあてはまる言葉だ。ブレイクは、「女の意志」を力を入れて描いた。ブレイクの「女の意志」の描写は生き生きとしていて、セクシーで魅力にあふれている。

「エマネーション」とカバラ伝統

ブレイクのエマネーションは、カバラ伝統のなかで描かれるエマネーションの概念とぴったり重なる。カバラ伝統では、神は「エイン・ソフ」(Ein-Sof)であり、十個ある「セフィロート」(Sefirot)とよばれるエマネーションを媒介として顕現する。「セフィロート」は、カバラ研究の第一人者ゲルショム・ショーレムによると、「神の本質とか性質の力であり、それをとおして絶対的な存在が自己を顕示させるもの」である。³ 神は「セフィロート」がなければ、認知されないわけだ。この重要な「セフィロート」にはさまざまな形容辞が用いられているが、そのうちの三つはブレイクが彼のエマネーションに用いたものと一致する。「光」(orot)と「衣服」(levushim)と「鏡」(marot)である。

じつは、ブレイクのエマネーションがカバラ伝統の影響を受けたかどうかについて、断定的なことは何もいえない。エマネーションの概念もそれを表現する語彙も酷似しているが、両者の接点について明確なことはわかっていない。神秘的伝統の研究で多大な貢献をしたキャスリーン・レインですら、「ブレイクはユダヤのラビの教えか、ひょっとしたらキリスト教のカバラのグループの教えに馴染んでいたかもしれない」と推測するのみだ。⁴

しかし、ブレイクの「エマネーション」とカバラ伝統の「セフィロート」と

が酷似しているという事実は、これから示す考察であきらかになると思う。ブレイクはこれまで考えられていた以上に濃厚にカバラ思想にかかわっていたのかもしれない。ただ、ブレイクがカバラ思想を自己流に変形したことも事実だろう。たとえば、カバラの「セフィロート」を媒介として顕現する根源的存在は、「エイン・ソフ」とよばれる神であるわけだが、ブレイクのエマネーションの流出源は人間（男）である。ゆいいつ絶対的な神ではない。

エマネーションの居場所

エマネーションの居場所は、男の肉体のなかである。墮落した人間の代表格であるアルビオンにもエマネーションがいて、ジェルサレムという名前があたえられている。彼女は、彼の胸のなかにいる。

すでに墮落して人間不信に陥っているアルビオンであるが、彼を徹底的に死の淵に追いやりようとする敵は多い。その敵たちがアルビオンに致命的な一撃をくわえるために実践しようとするのが、アルビオンの胸のなかに入って彼のエマネーションを殺すことである。谷や丘や川は、こう証言する。

彼〔アルビオン〕の魂をむさぼり食う者たちは、彼の胸のなかに迎えられている！

彼のエマネーションを破壊することが彼らの意図なのだ。

（『ジェルサレム』36〔40〕葉16－17行）

敵対する者はエマネーションを狙ってくるはずだ、という認識はアルビオン本人にもある。だから彼は、自分の肉体を覆って敵が侵入するのを防ごうとするのだが、敵と味方を取りちがえてしまう。敵を迎え入れて、味方を遠ざけてしまったのだ。アルビオンが肉体を覆いながら逃げていく様子は、つぎのように描写される。そこにはエマネーションへの言及もある。

…………アルビオンはますます憤って逃げた。復讐心に燃え、
顔や胸を石のような堅さで覆いながら。さらに手も
足も。だれも彼の胸に入って彼の隠された心を抱擁したりすることが
ないようにと。彼のエマネーションは彼の内部で泣き震えていた。

（『ジェルサレム』33〔37〕葉12行－34〔38〕葉3行）

これは、アルビオンを墮落から救おうとする味方が彼に接近したとき、彼が取る行為である。味方は、ロスをふくむ四人の男で、「四ゾア」とよばれる。彼らのことを敵だと信じこむアルビオンは、彼らが「彼の胸に入って」こないように、「顔」と「胸」を覆いながら逃げる。自分の「隠された心」すなわち「エマネーション」に触られないように。「石のような堅さで」覆ったというから、よほど強固に拒絶したのだろう。

エマネーションを胸の奥深く隠したり、エマネーションが所在する肉体の部分の覆ったりする行為は、墮落したアルビオンがときどき見せるものだ。『ジェルサレム』の冒頭ちかくでも、親友であるはずのジーザスを宿敵と思いがちにするアルビオンは、はげしい拒絶の言葉をジーザスに投げつけたあと、やはりエマネーションを隠す。

そのようにアルビオンは嫉妬の恐怖をいだいて話し、彼のエマネーションを隠した。

(『ジェルサレム』 4 葉33行)

エマネーションを強固に守り隠したつもりでも、アルビオンはそもそも敵と味方をとりちがえているし、自分の肉体の覆いかたもすこし間が抜けている。「顔」と「胸」と「手」と「足」を覆ったのはいいけれど、ブレイクにとって重要な肉体の部位である「腰」が覆い忘れられている。「頭、胸、腰」というのは、ブレイクの作品のなかでしばしば出てくる肉体の三大部位である。⁵ なかでも、腰はセックスによる他者との交わりの部位として重要で、他者の侵入を防ぎたいアルビオンとしては、一番に覆うべき部位なのだ。そこが覆われずじまいということは、アルビオンがロスたちと交わる可能性を残していることになる。

エマネーション（一）：光として男から放射される女

アルビオンの肉体のなかに閉じこめられて、外界と隔離されたエマネーションは、泣いて震えている。彼女は本来、泣いて震えるための存在ではない。あるべきエマネーションの姿を「光」と「衣服」だと述べるのは、『ジェルサレム』の語り手。

偉大なる永遠界で、それぞれの固有の形が発散し放射するのは、
 独自の光である。形とは神のヴィジョンであり、
 光とは彼の衣服である。これは
 すべてのひとなかのジェルサレムである。

(『ジェルサレム』54版1-5行)

男は「神のヴィジョン」といいかえられ、女はそこから放射する(エマネイトする)「光」だと定義される。これがエマネーションである。男の肉体の内部にこもるのではなく、反対に外部にむかって出ていくのだ。

「光」なのだから、オーラのように男の周囲に広がっていくのだろう。外部へ広がった光は、ほかの男から同じように放射されたべつの光と交わることができる。この光と光の交流が、「エマネーションたちが……抱きあい、交じりあう」(本論21ページに引用)とロスが形容したことである。

光と光の交流は、至福の人間関係を約束する。

………彼ら[ハンドとハイル]は外へ行き、兄弟の混じりあった愛情から出る

光の美しい光線のように、もどってくる。

全地球の住人たちは、彼らの優雅な光のなかで喜ぶ。

(『ジェルサレム』71葉23-25行)

エマネーションという語彙こそ使われていないが、ここで起こっているのはエマネーションどうしが光となって抱擁しあうこと、それによって男たちも交じりあうようになること。しかも、全地球のひとびとにまで、彼らの至福な光は広がっていく。

男が自分のエマネーションを相手にむけて放射するとき、自己と他者の境界線は崩壊する。エマネーションは、自己の肉体もふくめて私有物という概念を打ち砕く。男と男のコミュニケーションが可能となるのは、エマネーションがこのように自己を他者にむけて開かせるからだ。

しかしもし、エマネーションどうした拒絶しあったら、ロスが懸念するように男どうしも「恐れてパッと離れてしまう」(本論22ページに引用)。エマネーションどうしが反目しあうのは、「嫉妬」のせいだとロスは『ミルトン』のなかで指摘する。そしてほかの女(エマネーション)が自分の夫と寝ようとする

のを、矢を射って追いはらうエリニトリアという名のエマネーションが登場する。彼女の嫉妬に、ロス は絶望的な気持ちになる。

エリニトリアよ、山々をかけめぐるこの嫉妬をどこから起こしたのか。

.....

永遠界のすべてのものは、自分の内なる光によって輝く。しかし
おまえはすべての内なる光を、嫉妬の角のなかで
死の消えていく月に結んだ矢筒の矢でまっ黒にしてしまう。

(『ミルトン』10 [11] 葉14-18行)

「自分の内なる光」というのは、エマネーションのこと。この光を「真っ黒」にしてしまうのが嫉妬だという。

エマネーション (二) : 衣服として男をつつむ女

エマネーションは「光」として形容されるだけでなく、「衣服」としても語られる。この衣服は物質的衣服ではない。男から放射されて、男をオーラのよう包む衣服なのである。さきほど引用した一節のなかで、エマネーションは「光」であると同時に、「衣服」とも定義されていた。もういちど、その節を見てみよう。

偉大なる永遠界で、それぞれの固有の形が発散し放射するのは、
独自の光である。形とは神のヴィジョンであり、
光とは彼の衣服である。これは
すべてのひとなかのジェルサレムである。

(『ジェルサレム』54葉1-5行)

この衣服は自分の意志をもたず、自分の形を主張しない。もし衣服がそれ自体の形を主張して、主体(男)の形を隠してしまったら、それはもはやエマネーションではなくなる。男の形を覆い隠すような衣服やヴェールを織るのは、あとで考察する「女の意志」である。こちらの女はオーラとしての衣服ではなく、物質的な衣服で男たちを覆い、自分の支配下におくのである。

『ジェルサレム』をふくめて後期のブレイク作品は、女の意志の有無にこだ

わりを見せる。『最後の審判のヴィジョン』のなかでも、こんな句がある。

彼女は自分の意志をもたない。永遠界に女の意志というものは存在しない。

(『最後の審判のヴィジョン』85葉)

「光」や「衣服」として男から流出して、男をほかの男との交流へ導く女。エマネーションをなま身の女と考えると、とてもラディカルなブレイクが見えてくる。主体の男とエマネーションたる女はペアをなすが、それを夫婦と考えると、ブレイクがエマネーションをつうじて行おうとしているのは、夫婦という単位をこえたフリー・セックスによる妻や夫の共有だからだ。そこでは嫉妬が一番の障害。

ブレイクはそうしたヴィジョンを、現実の生活のなかでもある程度抱いていたようだ。ブレイクを彫版師としてある時期に雇ってくれた出版者にジョゼフ・ジョンソンがいたが、このジョンソンは急進的な思想家や芸術家たちが好きで、そうしたひとたちの作品を出版していた。また彼は、そうしたひとたちを自宅に招いて、軽い夕食をごちそうしては談話会を開いていた。このジョンソン経由で出会ったメアリ・ウルストンクラフトに、ブレイクは魅惑された。そして妻のキャスリンに申し出たのだ。ウルストンクラフトを加えて三人で住みたい、と。これは妻の反対にあって実現しなかったが、夫婦のなかにべつの女（あるいは男）が交じりあうセックス関係を、ブレイクは現実のレベルで想定していたのだ。

妻（エマネーション）をたがいに共有しようというメッセージは、「聖なる家族」がアルビオンに説教するときにも暗に発せられる。「聖なる家族」は明言してはいない。しかしつぎの言葉において、たがいに与えあい、受け取りあうのが何かは、説教されたアルビオンにもわかるはずだ。

与えあい、受け取りあい、たがいの侵入を許しあいながら。

(『ジェルサレム』33 [37] 葉22行)

むろん、エマネーションと与えあい、受け取りあうのである。またその行為が、自己と他者の境界線をこえて相手の縄張りに入ることである。この侵入は許される。エマネーションとはこうして、夫（男）によってべつの男に与

えられ、男どうしの交流に中心的な役割をはたすのだ。

エマネイション（三）：鏡として世界を映しだす女

さて、「光」「衣服」につづいてエマネイションの三番目のイメージ、「鏡」の考察にうつろう。

エマネイションが鏡（"Looking Glass"）にたとえられているのは、『ジェルサレム』でエニサーモンがロスのエニサーモンとして失格と太鼓判を押された箇所。「エニサーモンの鏡」は、偽りの像しか映しださない。エニサーモンは大人の人間を歪めて、泣き青ざめた赤子として映しだしている。

人間の形ではなく、性の形、小さな
泣き青ざめている赤子が映しだされている。
エニサーモンの鏡のなかに数多く。

（『ジェルサレム』63葉20－22行）

エニサーモンの鏡の歪みは、現在起こっている残酷な行為もねじ曲げて伝える。ヴェイラという女がアルビオンを殺害するという恐るべき事件が、「エニサーモンの鏡のなかでは脇へ押しやられていた」（63葉38行）。だからロスはその事件を正しく理解できず、「大気による詩的ヴィジョン」だと思いこむ。

彼はヴェイラの手のなかに、復讐に満ちたドルイドのナイフと
嫉妬に満ちた毒のカップを見た。そしてそれを大気による詩的ヴィジョン
だと思った。

（『ジェルサレム』63葉39－40行）

「大気による詩的ヴィジョン」というのは、まるで『嵐』のプロスペロがミランダとファーディナンドをもてなすために演じさせた精霊による劇のようである。ヴェイラによるアルビオン殺害はほんとうに起こっているのに、ロスはそれをヴィジョンとしか思えないのである。

エニサーモンの鏡は歪んでいるが、本来エマネイションの鏡は、物質に捕らわれた目が見ることの出来ないものを映しだすものである。たとえば、「ロスの門」は「エマネイションによってのみ見るのであり、植物化し

た目には見えない」(『ジェルサレム』34葉56行)。「ロスの門」とは、神性と墮落の境にある門だ(35葉81-36葉10行)。エマネーションのみがこの門、すなわち神性と墮落との境を見きわめることができる。エマネーションにはすぐれた透視力があるのだ。そして彼女は、何が神々しく何が墮落しているのかを鏡に映しだして、男に教えることができる。

女の意志(一)：男から独立した女

エマネーションはたしかに男(人間)に不可欠だ。しかし、彼女が期待どおり働かないと、男は神々しさを失い、肉体を覆って逃げるようになる。彼は自分と他人のあいだに境界線を引き、自分の縄張りを侵害されまいとするようになる。自分のエニサーモンが他人に触れられることに、がまんできなくなる。こうして、彼は自己の小さな殻に閉じこもり、萎縮していく。

エマネーションどうしが交じりあえば、男たちは相手の胸のなかに入って交流しあえる。エマネーションが重要なのは、この交流を実現させる契機だからだ。しかし男たちは、なかなかそれを実現できない。「女の意志」が妨害するからだ。

「女の意志」は墮落した世界での水先案内人で、人間をさらなる墮落へ導く。彼女は永遠界という理想の世界では、存在しえない。彼女が存在しない状態が、永遠界と定義されているのだから。エマネーションがエマネーションであることをやめて、自分の意志をもつとき、女の意志へと変貌する。女の意志が誕生するプロセスは、ブレイクの作品のいたるところに描かれている。

たとえば、『ユリズンの書』では男からはじめて女が分離して、独立した存在になるようすが描かれている。女はエニサーモン、男はロスである。エニサーモンは「女の意志」という言葉でこそ形容されていないが、ブレイクにおける女の意志の初期の例である。ときは夜。ロスから「血の球体」ができる。この球体は震えて、彼から分離しようとしている。

生命の血の球体は震えていた。

根に枝わかれしながら。

繊維ができて。風のうえて悶えながら。

血の繊維、ミルクと涙。

あえぎのなかで。永遠に、永遠に。

とうとう涙と叫びのなかで、女の形が
実体化した。震えながら、青白く。
彼の死のような顔のまえて揺れながら。

永遠界は、いまや分離した最初の女を
見て、身震いした。
それは雪の雲のように青白く、
ロス顔のまえて揺れていた。

(『ユリズンの書』18葉1-12行)

独立した女となったエニサーモンは、永遠界のひとつとによって「最初の女」とよばれる。永遠界のひとつとは、これまで永遠界に存在しなかった女の意志に恐れをなして逃げただけでなく、彼女とロスをテントで覆ってしまう。ひとの目にふれないように、と。女が男から分離して自分の意志をもってしまうのは、忌まわしいできごとなのだ。

この分離した女は、もはや男にとって役に立つ従順な存在ではない。彼女はセクシュアルな存在となり、ロスを焦らして残酷な喜びにひたる。

彼は彼女を抱いた。彼女は残酷で
倒錯した喜びのなかで泣いて、拒絶した。
彼女は彼の腕から逃げた。そして彼は追った。

(『ユリズンの書』19葉11-13行)

女の意志（二）：男を無力化する

後期の『ジェルサレム』における最大級の女の意志、ヴェイラ。彼女もエニサーモンとおなじく、セクシュアルな魅力で男を縋ろうとする。しかも、男を焦らすことにとどまらず、男を無力化してしまう。

ヴェイラは、人類の代表者であるアルビオンのまえに出現する。すると、アルビオンはきゅうに魅せられたように彼女に話しかける。

きみとこれまでに会ったことがなかった。(中略)

きみはどこから来たのか。きみはだれなのか。ああ、このうえなく愛し

いひとよ。神のヴィジョンも

きみのまえでは無に等しい。すべての生命と喜びが色あせる。

(『ジェルサレム』29 [33] 葉31-34行)

ヴェイラのことをいまはじめて出会った「このうえなく愛しいひと」とよぶアルビオンは、もう彼女のことしか見えなくなっている。彼自身、「神のヴィジョン」でさえヴェイラの魅力にくらべたら、「無に等しい」といつている。ここからアルビオンの墮落が加速していく。

ヴェイラも、自分と「神のヴィジョン」すなわちジーザスを比較して、自分のほうが上だと主張する。ジーザスは完ぺきといつていいほど冒瀡される。ヴェイラはこういう。

さあ、わたしのことを思いだすのよ。わたしを見てごらん。わたしだけが美しいのだから。

想像力をもつ人間の形なんて、ヴェイラの息にすぎない。

わたしが彼に息吹をあたえ、わたしの秘密の洞窟から天へと吹きあげてやったのだ。

女から生れ女に従う生きもの。いいこと、強大なひとアルビオン。

神々しい姿は兄弟愛だけれど、わたしは性愛なのだ。

わたしの赤い火で兄弟愛の領域へと昇格させるのだ。

(『ジェルサレム』29 [33] 葉48行-30 [34] 葉1行)

ヴェイラはジーザスのことを「ヴェイラの息」とよんでいるが、この句は彼女が自分とジーザスとの関係をどう考えているかを表している。ヴェイラが呼吸する実体であり、ジーザスは彼女の「息」というわけだから、ジーザスは主体性をはく奪されることになる。

さらに、ジーザスはヴェイラから「息吹をあたえ」られて産まれたのであるから、彼らは母子の関係になる。ヴェイラはジーザスを「秘密の洞窟」から天へと吹きあげてやったというが、なるほど、「秘密の洞窟」は「子宮」を暗示する。彼女が母体で、ジーザスは無力な赤ん坊なのだ。

女の意志（三）：死の衣を織る

ヴェイラの言葉を聞いたアルビオンは、自分の肢体に異変を感じはじめる。

きみがヴェイラか？とアルビオンは言葉を返した。ほくの眠りの姿よ。
ああ、何てほくは震えるんだろう。何てほくの手足は乳白色の恐怖を滴
らせているんだろう。

露に濡れた衣が僕を包みこむ。男らしさはまったく消え失せてしまった。
きみの言葉を聞き、きみの顔を見ると、死の衣がほくを包みこむのだ。
頭から足まで。死と永遠の恐怖の衣が。

（『ジェルサレム』30〔34〕葉2－6行）

アルビオンの体はヴェイラの「死の衣」にすっかり包みこまれ、「男らしさ」
は消え失せる。アルビオンはヴェイラの衣に包まれた存在として、彼女の手中
に生まれ落ちたのである。はからずもロスは、まぎれもない「分娩の金切り声」
（30〔34〕葉23行）を耳にするのである。

じつは、衣を織ってほくの身をつつんでくれ、とヴェイラに頼むのは、アル
ビオン自身である。アルビオンの要求に答えて、ヴェイラはアルビオンの衣を
織る。ところが、衣を織ることは肉体そのものを織る（造る）ことと同義だ、
とアルビオンは考えている。

……ほくの病気のせいですべてに永遠の死がやって来てしまう。もし、
汚れた精神を包みこむために

きみが清らかな肉体を織ってくれないと。ヴェイラよ。

（『ジェルサレム』21葉11－12行）

ところが、皮肉にもアルビオンが得たものは、死を防ぐことではなく、反対
に魂も何もかもヴェイラのヴェールに織り込まれて消失してしまうという存在
の危機だった。「僕の魂はヴェールのなかに織り込まれて、溶け去ってしまった」
（『ジェルサレム』23葉4行）と気づいたときには、遅すぎたのである。肉
体を織る（造る）という行為は、このようにヴェイラが手がけている。ヴェイ
ラが衣を織っているときには、肉体が造られているという暗示がつねにある。

アルビオンの肉体を造りおえたヴェイラが、『ジェルサレム』25葉の全ペー

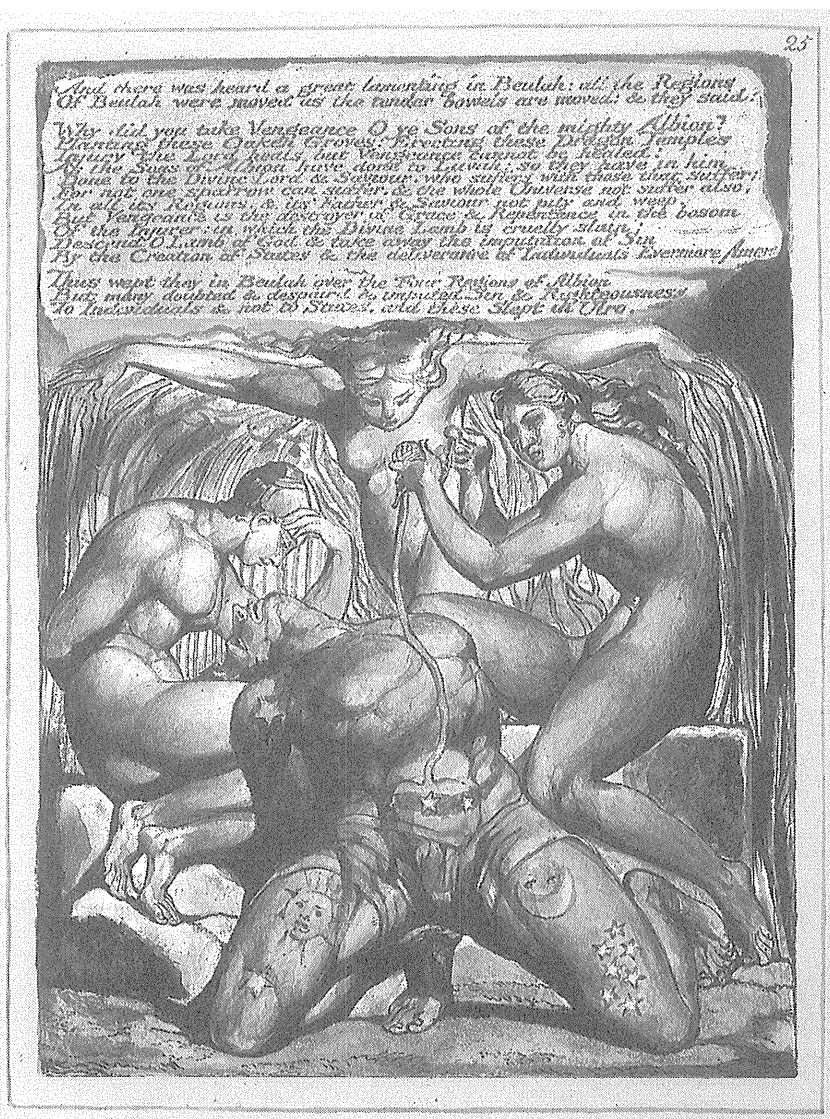


图 4

ジのイラスト（図4）に描かれている。ヴェイラをはじめとする三つどもえの女の意志たち（ほかのふたりはラハブとティルツァ）が、アルビオンを取り囲んでいる。ヴェイラが衣をアルビオンの頭上から広げ、魔術の円と呼べそうな円をつくって、彼を覆っている。この魔術の円のなかにあって、左側の女は彼の顔を覗き込み、魔術の力によってか彼を精神的に捕えているようである。右側の女はアルビオンのヘソのあたりから伸びている繊維状の管の端をつかんでいる。この管について、ディヴィッド・V・アードマンは「切られることのなかった（中略）ヘソの緒として象徴的に解釈できるかもしれない」、⁶と鋭く指摘している。ヴェイラはこうしてアルビオンをわが子として創造し、その後もヘソの緒でもって彼をしっかりとつかんでいるのである。

アルビオンがヴェイラに完全に支配されたことは、すぐあとにつづくアルビオンのモノログからわかる。彼は自分に起こった不幸に気づいて、「ああ、生命とは何か、人間とは何か、死とは何か？」（24葉12行）とはじめる。そして自分を責めかつ哀れんで、最後に「希望は失せてしまった」（24葉60行）と結ぶのである。この「人間とは何か」のモノログがある24葉には、ヴェイラが自信たっぷりの誘惑的なポーズで描かれた小さなイラスト（図5）がある。彼女の視線は、あたかもアルビオンのモノログをコントロールするかのようになり、テキストのその部分にじっと注がれているのである。

意志の女（四）：テキストを書く

繊維を織る（weaving a textile）という行為は、テキストを書く（writing a text）という行為と、語源的に重なっていることはいうまでもないが、ブレイクはふたつを視覚的にも重ねあわせた。

アルビオンがヴェイラのヴェールで覆われているイラストをいま考察したが、アルビオンだけでなく世界が彼女のヴェールで覆われるようになることを暗示するイラストが、『ジェルサレム』にある。64葉の上のほうに描かれたイラスト（図6）が、それだ。ヴェイラが巻物を書いている姿が見える。この巻物は「年代と世代の織物」とよばれ、「ヴェール」にたとえられている（『ジェルサレム』64葉2－3行）。すでに書き終えられた端のほうから、巻物をふたりの女（恐らくヴェイラと三つどもえを組んだラハブとティルツァ）が広げている。そしてその巻物はヴェールとなって、世界を覆うのである。ちょうどアルビオンの肉体を織ったように、世界までも彼女流に書きかえようとするので

What have I said? What have I done? O all-powerful Human Words:
You recall back upon me in the blood of the Lamb slain in his Children:
Two bleeding Conventions equally true, are his Writings against me
We raised another Statue: we danced naked around them:
Mocking to those, long ago, as they, in Jerusalem's shame:
Displaying our Giant Lungs to all the Winds of heaven's Squalor:
Shame stung us, we could not look on any greater sin abhorrence: the Blue
Of our immortal Veins & all their Lusts, deep from our Lungs:
And wondrous strange, in a solemn Night, clouded & dark:
The Sun fled from the Earth's reverent: the Moon from his mighty loins
Scandinavia fled with all his mountains filled with groans

O what is Life & what is Man, O what is Death: Wherefore
Are you not Nature's natives in the Grass to which I bring
Or do you burn to feel the danger Ravages of Destruction
To be the sport of Accident: to waste in Wrath & Love a weary
Life in arduous toils & anxious labours, that prove but empty
Of reward, except they have known the Cause of their misery:
The Cities of ivory & gold, the Castles of silk & fine
Linen, the Pavements of precious stones, the Walls of pearl
And gold, the Seats of magnificence, the Windows of Crystal
The Courts of Beauty, the Gardens of flowers, the
Streets of gold, the Winds blowing over the little ones of Albion:
O Human Imagination! O Divine Body! I have Crucified
Have gained my feet upon thee into the Woods of Avarice & Lust:
There I have been buffeted in the Waves, founded in human destruction:
O Babylon thy Wrecking stands over thee in the night
The severe Judge all the day long proves thee O Babylon
With thine excess of prosperity, with thy lusts desire,
But thou art cast forth to the Potter, his Children to the Builders
To build Babylon, because they have forsaken Jerusalem:
The Walls of Babylon are built of Hell, her Gates the Crocodiles
Of Nations, her Towers are the Misantries of once happy Families:
Her Streets are paved with Destruction, her Houses built with Death:
Her Palaces with Hell & the Grave, her Synagogues with fragments
Of her hardening, "Assume" sword & poisoned with cruel steel
You wast, Love as thy summer cloud upon my hills
When Jerusalem was thy hearts desire in times of youth & love:
Thy Sons came to Jerusalem with gifts, she sent them away
With blessings in their hands & on their feet, flowery of gold:
And now & diademed thy Daughters stand in her Courts:
They came up to Jerusalem: they walked before Albion
The Exchanges of London every Nation walked
In London Street, in every Nation subject to love & harmony
Alban, toward the whole Earth, England encompassed the Nations:
Mutual each within others bosom in Visions of Regeneration:
Jerusalem covered the Atlantic Mountains, the City of Peace
Can accept of Christ in Christ in Prosperity, Peace & England:
Mount Zion lifted her head in every Nation under Heaven:
And the Mount of Olives was beheld over the whole Earth:
The footsteps of the Lamb of God were there: but now no more
No more shall I see him, he is dead, he is buried, he is
In way these saints of David, the gentlest mildest Jew:
God was Merciful, but could not be: O Lamb of God,
You art a delusion and Jerusalem is my sin: O my children
You are educated in the precious Cities of Destruction:
All you have assumed the Providence of God & slain your Father
Not that appear before me who lust glad in Luvah's Squalor
Not that forgive me: that who were dead of art, alive
Look not at Jerusalem: O that I could stand at God's
Side, I die in thy arms the Hope is banished from me:

Thundering the Yell rushes from his hand Vegetating Knot by
Knot, Day by Day, Night by Night, loud roll the indignant Atlantic
Waves & the Earthquake, turning up the bottoms of the Deep

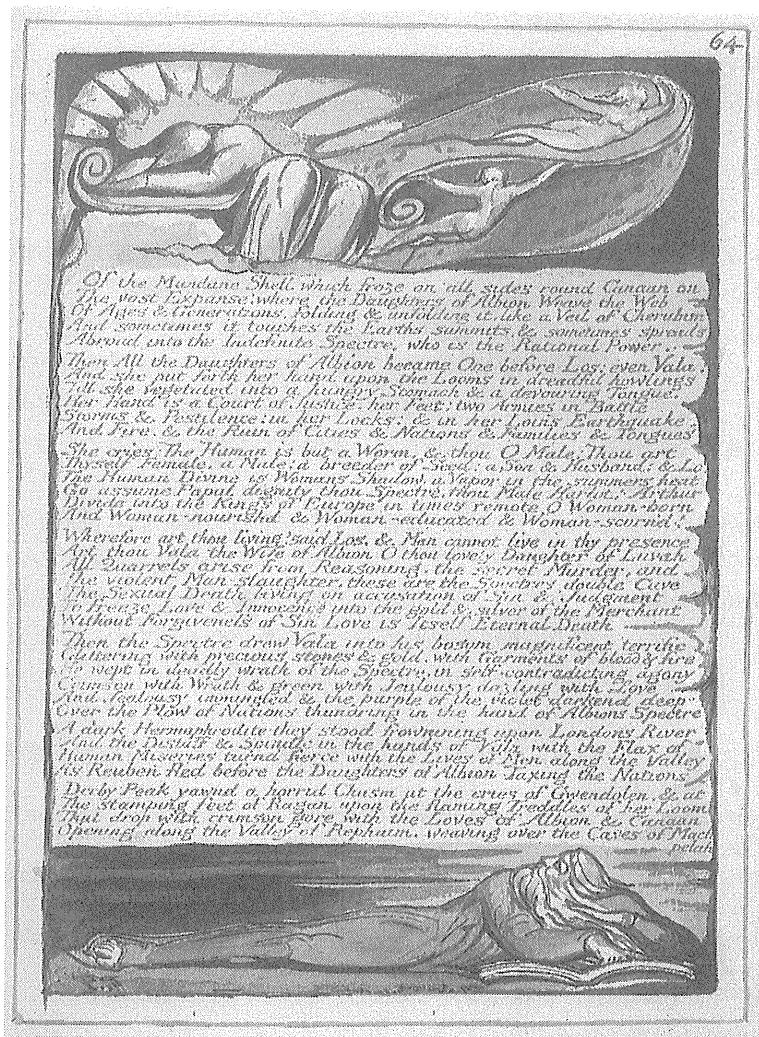


図 6

ある。

ヴェイラが書いている内容は、はっきりと述べられてはいないが、推測することができる。ジーザスをしきりに卑小化したがるヴェイラのことだ。彼女がめざすのは、ジーザスをさしおいて彼女自身が神の座におさまるような世界に書きかえること、そのような創世記を書くことである。

男や世界のうえに支配力をふるう「女の意志」。彼女の存在を問題視するのは、ロスである。本論の22ページに引用したロスの言葉（「ああ、アルビオンよ、きみはなぜ女の意志を生みだそうとするのか」）は、男が彼女の台頭をゆるすことが墮落のはじまりであり、ひとが神々しさを失う契機だと主張する。アルビオンにおこった事態は、まさにロスが警告していることである。しかしアルビオンは、ヴェイラのセクシュアルな魅力にあまりに心を奪われてしまったので、彼女をますます増長させるばかりである。アルビオンがヴェイラという女の意志を問題視しはじめないかぎり、人間として健全になることはない。ロスは、そう主張する。

ひとが健全になるとき、女の意志は消えてなくなる。彼にはエマネイションだけが存在する。こうした健全なひとは、ブレイクの作品のなかでどのような人間関係を展開するのかを、つぎの機会に考察したい。また、女の意志に支配されたひとには、どのような人間関係が待っているのかも明らかにしたい。

¹ くわしい考察は、今泉容子「ブレイクの自己愛の詩」（『イギリス・ロマン派研究』14号、16-24頁）参照。

² David V. Erdman, *Illuminated Blake* (Garden City, New York: Anchor Press, 1974), p. 65.

³ Gershom Scholem, *Kabbalah* (Jerusalem, Israel: Keter Publishing House Jerusalem Ltd., 1974), p. 100.

⁴ Kathleen Raine, *Blake and Tradition* (Princeton, New Jersey: Princeton University Press, 1968), Vol. II, p. 211.

⁵ 『四ゾア』7葉354行、7葉381行、8葉55行、『ミルトン』20葉38行など。

⁶ Erdman, *Illuminated Blake*, p. 304.